

早稲田大学本庄高等学院

2018 年度学校自己評価・関係者評価

はじめに

早稲田大学本庄高等学院による 2018 年度の学校自己評価は、従来と同様、各専任教員が、生徒による授業評価、保護者の本学院の教育に対するアンケート等を参照した上で、授業・卒業論文・クラブ活動・研究活動等について評価し、さらに本学院内の教務室・各委員会・各学年・事務所等がそれぞれの活動の評価を行なった。そしてそのうえで、学校評価運営委員会がそれらを理念・目的、教育活動、生徒、研究活動、教育研究施設、社会・大学との連携、管理運営の 6 項目にまとめて評価を行なった。また、2019 年 4 月 20 日には、外部関係者を招いて、関係者評価を実施している。

以上の自己評価が令和元年以降の教育・研究のさらなる改善、さらには 20 年の大学入試改革や 22 年度に施行される新学習指導要領への対応を念頭に置いたものであることは言うまでもない。

I. 理念・目的

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された 3 つの建学の理念、すなわち「学問の独立」・「学問の活用」・「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、00 年に「21 世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08 年には創立 125 周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田から WASEDA へ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティとして構築することを目指すとした。さらに、創立 150 周年を展望した「Waseda Vision 150」を 12 年 11 月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

本学院も「Waseda Vision 150」に関連し、12 年 11 月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。本学院は早稲田大学で一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院は、早稲田大学教旨・「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいて教育・研究活動を行なうことが目的である。生徒に対しては、知的関心を高め、論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承されている。

II. 教育活動

①授業

a. カリキュラム

カリキュラムは 1 年次から 3 年次まで各年度 32 単位構成で 3 ヶ年 96 単位となっている。1 年次は芸術科目の音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。第 2 学年ではゆるやかな文・理選択分けを行なっている。すなわち文系、理系それぞれ 5 時間分の選択必修科目を履修する。この際、文系選択は数学Ⅱ（3 単位）、古典講読（2 単位）とし、理系選択は数学Ⅱ文系（3 単位）、物理（2 単位、うち 1 単位は「科学課題研究」）である。第 3 学年は 32 単位のうち、共通科目（15 単位）、必修選択科目（12 単位）、自由選択科目（2 単位）、総合的な学習の時間（2 単位）、HR（1 単位）の構成となっていて、文系と理系では必修選択について科目および科目数が異なる。前者は 6 科目 12 単位、後者は 4 科目 12 単位である。また「総合的な学習の時間」は、キャンパスに素材を求めた半期ごとの輪講形式の「大久保山学」（1 単位）、「課題探究」（1 単位）という構成で、「課題探究」はさらに年度計画で「卒業論文指導」及び「修学旅行事前学習指導」に配分している。

b. 必修科目

18 年度の必修科目の授業計画は、例年通り、前年度の生徒の授業評価結果の分析・検討に基づいて作成している。すべての教科においてシラバスを年度初めに作成しそれに沿って授業が展開する。各教科で、第 1 学年では主に基礎学力重視の観点から中学校の内容との連続性を意識した展開や第 2 学年では学力の充実・発展の観点からの構成を考えた。第 3 学年では学部教育との連携を意図して、各学年、各科目の特徴を捉えて授業を行なった。従前から、生徒の授業評価の観点項目にある

「わかりやすい授業」、本学院ならではのオリジナリティーの追求、探究や思考力、判断力、表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、社会との関わりを認識することなどが目指された。具体的には理数教科で学部教育の基礎となる 学力の強化をはかる様々な取り組み（例えば数学の試験成績が基準に達しない生徒に対する放課後の補習と追試など）を行なった。さらに語学や人文社会科学系の科目では、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業も多く、またプレゼンテーション技術の習得や論文執筆指導を含む授業展開も多くなされた。また、各科目の節々で全員に課せられる卒業論文を意識したアカデミックリテラシーを意識した展開がなされていることも本校の特色である。

c. 選択科目

本学院のカリキュラムの最大の特徴として、第 3 学年に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第 2 外国語（仏、独、中国、朝鮮語等）も含む選択科目は、必修と自由を併せて合計 7 科目 14 単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、時代に必要とされる力を意識したもの、早稲田の一員ということを認識させるものが多く設置されている。

d. 英語テスト

4 月に GTEC-S、9 月に TOEFL もしくは TOEFL Junior と、年 2 回全校一斉に授業日に英語テストを実施した。これはいくつかの学部で英語力が進学の際の資格要件として課されているということ、どの学部からも調査書と共に英語の外部テストスコアの提出を求められていることに対応する方策でもある。

e. 大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、キャンパス環境を利用した科目横断型の学習教育プログラムとして、学際的かつ総合的な視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとした。本学院を取り巻く自然環境や歴史的遺産を、生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となっている。

地理的には本学院は浅見山丘陵に位置し、面積は 70 数 ha、長辺は 1.5km に及び、旧校舎が建つ尾根筋および旧グラウンドを含む一帯が「大久保山」という字名であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。当該丘陵からは埴輪や土器などが大量に出土しており、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、大久保山全体が歴史的遺産と位置づけられる。また「希少野生動植物」に指定され保護対象となっているオオタカをはじめ、多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに本庄キャンパスの周辺には小山川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」（12 年 11 月公開）の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして 13 年の Waseda Vision150 の中で、「地域の特色を活かした『森に想い土に親しむ』教育を一層発展させた『大久保山学』をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るための教育プログラムを「大久保山学」としたのである。

授業は木曜日 2 時限目、8 講座同時開講とし、前期と後期で異なった講座を履修する Semester 制とした。生徒は 9 通りの組み合わせパターンのひとつを選択することとしている。以下は 2018 年度の大久保山学の一覧である（左：前期科目／右：後期科目）。

1. 「大久保山に住む人ってどんな人たち？」／『平家物語』から見る武蔵武士
2. 「本庄キャンパスを Web で世界へ」／「大久保山に住む人ってどんな人たち？」
3. 「不確実性下における意思決定入門」／「Silent Spring を通して考える環境破壊と大久保山」
4. 「Silent Spring を通して考える環境破壊と大久保山」／「大久保山の環境と生物多様性」
5. 「大久保山での学びと数学」／「本庄市周辺の歴史と文学」

6. 『平家物語』から見る武蔵武士／「自然がつなぐ科学たち」
7. 「大久保山の環境と生物多様性」／「本庄キャンパスを Web で世界へ」
8. 「自然がつなぐ科学たち」／「大久保山での学びと数学」
9. 「本庄市周辺の歴史と文学」／「不確実性下における意思決定入門」

f. 課題探究

第3学年の木曜3限に総合的な学習の時間「課題探究」が設定している。この科目は第3学年の組主任8名で担当し、年間20回の授業を修学旅行関連学習約10回、卒業論文指導約10回を年間計画で配置し、実施している。同時に、学年集会（ガイダンス・学院長による修学旅行関連講話）や学年行事（教育実習生によるパネルディスカッション）との関係も図った。

修学旅行関連学習では、事前学習の全体講義を2回、北京・韓国・台湾のコース別事前学習8回（ガイダンス、班決め・実行委員決め、しおり作り、交流時のグループ分けと発表準備、結団式）を行ない、事後学習1回（アンケート）を行なった。修学旅行不参加者については、PC室で卒論執筆作業を行なわせた。

卒業論文指導の1つとして、GEC(Global Education Center)ライティング・センターによる講義を1回行なった。同センターは、アカデミック・ライティング（学術的文章を書く技術）ルールを踏まえ、分野の別を問わず早稲田大学の学生・教員の「書く」ことをサポートしてきた実績をもつ。本学院の多くの生徒が学部進学後も同センターの指導を受けることになるので、高大連携・高大一貫教育の観点からの学習効果も期待できるわけである。

さらに、理系教育実習生によるパネルディスカッションを1回、組主任によるクラス別指導を5回実施した。

このように木曜3時限目を総合学習に振り替えたのは2017年度からであり、今年度が2年目である。第3学年の教育活動の核となる修学旅行と卒業論文について、授業時間での指導・準備が行なえたことの意義は大きい。この科目の設置によって、放課後に生徒招集の必要が多かった16年度までと比べ、生徒・教員の準備活動に余裕と深みをもたらした。

g. 卒業論文

卒業論文一斉指導とし、早稲田大学ライティング・センターによる講義を行なった（前述）が、今年は7月5日（木）の1回のみの実施となった。講義概要は、以下の通りである。

講師：佐渡島沙織先生

テーマ：「卒業研究をデザインする」

内容：問いを決める／データや資料の集め方／研究する対象の種類／資料やデータを整理する方法／研究デザイン／論文の構成など

会場：稲稜ホール

卒論の初期段階における作成方法や進め方についての内容であった。期末試験終了直後の実施であったが、本格的に執筆する時期である夏休みを目前に、生徒は真剣に聞き入っていた。ライティング・センターには昨年度、時期を改めて、執筆倫理やルールの指導、論文の見直し方・まとめ方の指導なども行なっていたので、講義が1回しか実施できなかったことは大変残念である。次年度以降は予定通り、年3回の実施を実現させたい。

また、卒論担当者決めのスケジュールとルールとを明確化するべく、2年次の卒論制作に関するスケジュールを、次のようにルール化することとした。

「学院生は、1年次～情報開示までの期間に、教員へ指導担当を依頼してはならない（教員は、同期間に、指導担当を引き受けてはならない）。」

新ルール下における2年生徒・教員の具体的な動きを整理し、非常勤講師には、年度頭の「非常勤講師ガイダンス」で、上記スケジュールを周知徹底する。また、現行では前年度版「卒論担当領域一覧」（参考資料）を1学期末に配布しているが、1学期初（4月頃）に配布時期を変更する。これにより、4月から9月の約半年をかけ、卒論のテーマや指導者について生徒に熟考させることができるだろう。

本校の実状を踏まえ、生徒・教員のそれぞれが、混乱なく充実した制作と指導とを成し得るよう、次年度も制度設計と環境整備とを進めていきたい。

②課外教育

a. 早慶野球戦観戦

第1学年では、6月2日（土）に「同じ目的をもって応援し、早稲田大学の学生としての絆を深める」を目的とし、東京六大学野球（早慶戦）の観戦を実施した。集合時間には5名の生徒が遅れたが、進行には影響がない程度であった。当日はうだるような暑さであったが、生徒は適度に休憩をとるなど対応し、熱中症などの体調不良は出なかった。試合は負けてしまったものの、早稲田大学校歌をみなで歌うなど、早稲田としての一体感を生徒は感じることができた。そのため目的は達成されたと評価できる。一方課題として、集合時間厳守の徹底のために、さまざまな事態を予測して行動するように改めて指導することが必要である。

b. 体育祭

5月31日（木）に実施した。4月から体育行事実行委員会を開き準備を進めた。また陸上競技部員が審判員をはじめとする競技運営に携わり、実行委員と共に運営を行なった。100m・200m・400m・1500m・本庄スペシャルリレーの個人トラック種目、走り幅跳び・走り高跳び・砲丸投げの個人フィールド種目、障害物競争・パン食い競争・三人四脚競争の個人レクリエーション種目、大縄跳び・綱引き・クラス全員リレーの団体レクリエーション種目をクラス対抗で行なった。真剣に競技に臨むクラスメイトをクラス一体となって後押しする姿が本行事の象徴である。新しいクラスでのコミュニケーションとまとまりが急速に進み、また第3学年の生徒にとってはクラス対抗で行なう最後の体育行事であり、高校生活の思い出となる貴重な行事であると感じられた。

また、実行委員並びに陸上競技部員を中心とした運営役員の手際のよい運営作業により行事全体が非常にスムーズに進んだ。

c. 人権教育

10月17日（水）の放課後に講演会「スポーツを通じたボランティア・支援を考える」を開いた。第1学年は「ブラインドマラソン」、第2学年は「車椅子バスケットボール」を題材とし、それぞれ講師の方に講演を頂いた。「ブラインドマラソン」では、視覚障害ランナーと伴走者のそれぞれの立場から競技についてのお話、モノの見え方や盲導犬への注意事項についてもお話を頂いた。「車椅子バスケットボール」では、競技の説明に留まらず、物事の捉え方や考え方についてのお話や実際のプレーをデモンストレーションして頂いた。講演の後半は、講師の指導により、生徒達が実際に競技を体験した。

d. 球技大会

第3学年修学旅行期間の10月18日（木）に第1・2学年で実施した。種目は、男子がソフトボールとサッカー、女子がバレーボールを行なった。天候にも恵まれ、白熱した試合展開が多く、クラスの団結力が見られた有意義な時間であった。

e. 秋の学年行事

第1学年では、10月19日（金）に「秋を五感で感じ、第1学年の相互理解を深める」ことを目的とした軽井沢・小諸への校外学習を実施した。コース制による引率教員の分散という前年度の反省を活かし、今年度は学年全体で1コースとした。遠足の内容は事前にアンケートを実施し、果物狩りとハイキングと決定した。当日は肌寒い中でのハイキングやリング狩りにて秋の味覚を味わうことなどを経て、生徒間の親睦は深まったため、本行事の目的は達成されたと評価できる。一方で、他の行事でも同様であるが、友人どうしの記念撮影に興じる生徒が多い。そのため、行事のたびにSNSへの投稿に関する指導を繰り返し行なう必要性を感じた。

f. 稲稜祭

10月27日（土）・28日（日）に開催した。運営は主に稲稜祭実行委員会（48名）によって行なわれた。今年度より中央ステージの位置がロータリー前へと変更となったが、特に大きな混乱はなく実施をすることができた。1日目の来場者が1031人・2日目の来場者が2665人と大変盛況であった。発表・展示の内容は、学院生企画・同窓会企画に分かれるが、そのうち学院生企画はクラス企画・公認団体企画・有志団体企画・本部企画で構成された。18年度は「稲進」をテーマにいろいろな改革が生徒自身の力により行なわれた。また17年度に引き続き、校内装飾に力が入れられた。

g. 芸術鑑賞教室

11月21日(水)に本庄文化会館で実施した。内容は落語「西の嘶東の嘶」(桂雀々・柳家やなぎ・鏡味味千代・桂竹もん)で、上方落語・江戸落語の聞き比べや太神楽を1時間半程度鑑賞した。落語の楽しみ方の解説があったので、生徒もよく笑い落語を楽しめているようであった。また落語の合間の太神楽も好評であった。

h. マラソン大会

12月15日(土)に実施した。体育授業の一環とし、男子約9.5km、女子約4.5kmの大久保山周辺をめぐるコースで行なった。

i. 課外講義

保健関係の課外講義として、学年ごとに、以下の3件の講義を行なった。

第1学年:「こころの健康」6月7日(木)

第2学年:「デートDVとは」6月21日(木)

第3学年:「依存症の実態と予防」9月13日(木)

このうち、第2学年対象の講義は、従来セクシャルヘルスについての講演を実施していたが、今年度よりテーマを「デートDVとは」とし、より高校生の健康課題に則した内容となり、集中して聴講することができた。

③課外活動

a. 生徒会活動

生徒会活動は生徒会公認団体活動(部活動)や生徒会の専門委員会活動など生徒会の活動すべてを指すこともあるが、ここでは選挙によって選ばれた生徒会執行部の役員たちの活動について述べる。主な活動は、生徒会予算作成、諸活動の企画・運営であるが、具体的には生徒総会の開催、国内外交流プログラムへの参加、稲稜祭生徒会ブースの運営、生徒会誌の発行であった。18年度の役員も、前年度に引き続き、生徒会活動をより活発にしようとする姿勢が大いに見られた。今年度は献血・コンタクトレンズケースの回収等も実施した。本庄市内の高校の合同文化祭である「六高祭」について、学内の調整や他校との連携の窓口を務めるのも生徒会執行部の役割となっている。

b. クラブ活動

昨年までと同様に、18年度も文化部門25、体育部門16のクラブが活動した。大学附属である本校では、部活動がたいへんさかんである。

クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各クラブはそれぞれの目的に向かって活発に活動した。

運動部門では、ソフトテニス部(男子)で2ペアが、関東大会・インターハイ出場を果たした。さらには、ほとんどの部活で県大会出場を果たすなど、その活躍は目を瞠るものがある。

部活動については、部員や顧問の負担軽減の観点から各県で活動時間のガイドラインが出され始めている。同時に、活動中の事故や指導の在り方にも一層の配慮が求められる時代であり、本校でも社会的情勢を踏まえながら、部活動の在り方の検討を行う必要がある。

④国内外交流

a. 修学旅行

授業時間の確保のため、18年度からは日程が1日分短縮されることになり、10月16日(火)から20日(土)までの4泊5日で実施した。生徒は各自の希望により3コースに分かれ、結果として参加者数は、北京コース65名(男子52名・女子13名)・韓国コース38名(男子26名・女子12名)、台湾コース218名(男子120名・女子98名)となった。不参加者は4名(男子2名・女子2名)であった。

北京・韓国コースは北京・ソウル市内の同じホテルに4泊し、台湾コースは台北市内に3泊、台中市内に1泊した。台湾コースは多人数のため、出国および帰国時は3グループに分かれて行動した。各コースとも第3日目に北大附中・台中一中・安養外国語学校とそれぞれ学校間交流を行い、親交を深めることができた。総合的な学習の時間で十分に事前準備したことで、今年度も交流を盛大に行なうことができた。生徒による事後アンケートでは、全般的によい評価が得られ、満足度も高かった。

一方で、日程の短縮について不満を感じる生徒も少なからずいたことは、無視できない。

b. 海外からの訪問交流

1) MWIT の来校 (4 月 18 日 (水) ~ 4 月 25 日 (水))

タイの Mahidol Wittayanusorn School(MWITS)の生徒 9 名教員 2 名が本庄学院を訪問し、学院生と科学交流 (授業参加、博物館・企業見学、大学訪問等) を行なった。MWITS はシンガポールの NJC と並んで本庄学院との交流の長い学校で、その歴史は 2005 年に始まっている。

今回のプログラムは、JST のさくらサイエンスプランの支援のもと、実施している。

2) 中国生徒の来校 (7 月 23 日 (月) 10:30~16:30)

中国全土から選抜された生徒 28 名と教員 2 名が本庄学院を訪問し、交流を行なった。このプログラムは科学技術振興機構 JST のさくらサイエンスプランの 1 つとして実施されている。当日のスケジュールは以下の通りである。

10:30 バスで来校。稲稜ホールで歓迎式典

11:30 交流 Cooking

12:30 昼食

13:15 歓迎お茶会 (茶道部)

14:15 記念撮影

14:20 実験教室 (手作りモーター)

実験教室では、ニクロム線と電池だけを用いて簡単なモータを作り、その回転数を競った。最後に、泥のバクテリアを用いて発電するキットの紹介をし、日中の共同研究を呼びかけた。

3) NJC の来校 (11 月 6 日 (火) ~ 11 月 13 日 (火))

2007 年度より開始された、双方の学校を訪問するこの交流プログラムは今年度で 12 回目になる。今年度のこのプログラムは、科学技術振興機構 JST のさくらサイエンスプラン予算を使って実施された。「世界の水問題を考える：NJC と早稲田の共同研究成果はどう役立つか？」というテーマで共同研究を行なった。

生徒 9 名 (女子 6 名男子 3 名) 教員 1 名が本庄学院を訪問した。SGH プログラムでの交流女子生徒 5 名教員 1 名も同時に来校した。

4) 北京大学附属中学の来校 (1 月 30 日 (水) 11:00~16:00)

開校以来の交流校である北京大学附属中学の生徒 67 名教員 7 名が本庄学院を訪問した。

11:10 からの稲稜ホールにおける開会式 (両校教員生徒代表挨拶、記念品の交換、学校紹介、パフォーマンス) の後、昼食 (教員は昼食の後茶道部によるお点前披露)、その後チアパート・陸上・サッカー・バドミントン・バスケットボールに分かれ、スポーツ交流を行なった。15:30 すべての競技が終了後、中央階段に集合し、院長の挨拶の後、記念撮影を行い、すべてのプログラムを終了した。

c. 留学

1) 長期留学

17 年度から、従来の 1 年留年する形になる留学制度 (「第 1 種留学」) に加え、留学期間を含めて 3 年で卒業することができる「第 2 種留学」の内規を定め、運用している。これは多様な異文化体験を通して複眼的思考を養い、帰国後、日常生活及び学校生活においてより一層の活躍を期待することを求めるためである。17 年度 3 名の生徒が第 2 種留学の留学生として認められて留学した。また 1 名が「第 1 種留学」をした。

18 年度は第 2 種 1 名、第 1 種 0 名である。ただし、相談に来る生徒も多く、今後の増加が見込まれる。

また 18 年度に、留学に臨む心構え、留学の意義、制度上の留意点をわかりやすく整理したしおり「留学を希望する皆さんへ」を整備した。

現在、いくつかの学校と留学校としての協定整備を目指している。

2) 短期留学

- ・スイス公文学園高等部が提供する短期海外派遣プログラム “Summer in Leysin” に生徒 1 名が参加 (7 月~8 月、6 週間)。
- ・韓国ハナ高校 (Hana Academy Seoul) と交流合意書を交わし、生徒 2 名を派遣 (3 月~4 月、2

週間)。

3) 受入れ (長期・短期)

- ・ハンガリーからの長期留学生 1 名 (4 月～1 月、AFS)。
- ・台湾からの長期留学生 1 名 (9 月～、日台交流協会)。
- ・韓国ハナ高校から、上記交流合意書に基づき、短期留学生 3 名 (1 月、2 週間)。

d. 海外研修プログラム

1) エンパワーメントプログラム・アメリカ研修

17 年度から、グローバル人材の育成を目的にする「エンパワーメントプログラム」と「アメリカ研修プログラム」を実施している。いずれも I S A という業者が実施運営する有料のプログラムで、SGH 事業終了後を見据えてのプログラムである。

「エンパワーメントプログラム」は、多様な視点でグローバル社会に貢献する若者たちの育成を目的に考案されたプログラムで、ディスカッションやプレゼンテーションをすべて英語で行なうものである。9 月 1 日 (土)～3 日 (月) の 3 日間行われ、20 名が参加した。

「アメリカ研修プログラム」は、19 年 3 月 17 日 (日)～27 日 (水) の日程で行なわれた。語学研修やシカゴ大学・ハーバード大学ビジネススクールなどの見学、シカゴの高校生との交流など盛りだくさんのプログラムである。32 名が参加した。

2) その他の研修

本校では、上記以外に多くの海外研修を行なっている。それらについては、科学関連プログラム、SGH の項で紹介したい。

⑤ 科学関連プログラム

本学院は 02 年にスーパーサイエンスハイスクール (SSH) 制度開始とともにその指定を受け、以後、05 年に再指定、10 年に再再指定され、全国の SSH 校の中で最古参である。15 年度、16 年度は経過措置校として活動を継続した。17 年度、18 年度については SSH 指定を受けていないので、これまでの SSH の取り組みを整理し、一部継続している。

a. 河川研究班による水環境プロジェクトおよび本庄市立藤田小学校との合同河川調査

本学院は 09 年度より「河川研究班」というプロジェクトチームへの有志を毎年 10 名ほど募り、大学院創造理工学研究科社会環境工学科研究室・本庄市・地元 N P O 法人・埼玉県環境科学国際センターとの連携で行なう市内 2 河川の環境調査・環境保全・啓蒙活動を継続している。この活動は部動とは別に行われているが、ほとんどの生徒が部活動のように 3 年間継続するので、基本的に毎年新学期に新入生を含めた有志を数名補充する形になっている。18 年度も藤田小学校との合同河川調査を春と秋 2 回実施した。事前学習も行なった。この活動は、埼玉県より 2018 年度彩の国環境大賞奨励賞を受賞した。

プロジェクト形式の水環境を取り巻く研究では、「河川エビの性比と環境ホルモンの関係」「日本の河川環境に適した小型水力発電機の開発」「地下水の NOx 汚染と脱窒菌を利用したその解決」を有志が行なった。水力発電機の研究成果は、朝日新聞社主催 2018 年度 JSEC 高校生科学技術チャレンジで入賞を獲得した。

b. 藤田小学校および市内小学校・市民総合大学の講師

12 年度より、本庄市立藤田小学校第 5・6 学年の年間総合学習の年間講師を本学院生徒がつとめている。内容は、環境問題へ問題意識を高める事、科学への興味関心を高める事、プレゼンテーションスキル向上を中心としている。18 年度は計 10 回の授業を行なった。

また、18 年度より同キャンパスにある早稲田本庄プロジェクト推進室との連携により、本庄市内小学校での講義を開始した。今年度は、旭小・西小・東小・北泉小・南小・共和小で各 1 回の講義 (2 時間続き) を実施した。講師は学院内で公募した生徒たちである。内容は基本的に「科学の楽しさを伝えるもの」「河川環境問題を伝えるもの」である。

本庄市の依頼により、夏休みに市民総合大学の講師を学院生が務めた。内容は「茶道入門」(茶道部が担当)、「ちりめんモンスターを探そう」(生徒有志が担当) である。

c. 親子科学教室

SSH 事業成果の地域還元を目的とし、毎年夏冬の 2 回（出張授業を含む）、本学院実験室で親子科学教室を開催している。18 年度は 7 月 31 日（火）に親子科学教室を行なった。

d. 特別講義「これがサイエンスだ！」

本学院教職員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、18 年度は次のように 8 回実施した。講義内容についてさらに深く探究したい生徒は後述するゼミ合宿を用意した。

- 第 1 回（5 月 23 日）「有限幾何学と組合せ論」（数学科：太田洋平教諭）
- 第 2 回（6 月 8 日）「 p 進数の不思議～新しい数の世界」（数学科：根本裕介教諭）
- 第 3 回（6 月 13 日）「人体の構造からみたスポーツ」（生物科：矢野健治郎教諭）
- 第 4 回（6 月 20 日）「人工知能とプログラミング」（荻潤二郎事務長）
- 第 5 回（11 月 2 日）「人工知能と物理学」（数学科：峰真如教諭）
- 第 6 回（11 月 9 日）「近似する数学」（数学科：成瀬政光教諭）
- 第 7 回（11 月 16 日）「サイバーセキュリティ最新動向」（情報科：飯島涼講師）
- 第 8 回（11 月 17 日）「岩石から読み解く過去の地球環境」（地学科：大澤雅仁講師）

e. Singapore National Junior College (N J C) との交流活動

8 月 1 日（水）～8 月 8 日（水）に生徒 9 名をシンガポール National Junior College に派遣し、校内外における様々なプログラムを実施した。交流の軸は共同研究であり、3 つのテーマについて実験・ディスカッションを行なった。

11 月 6 日（火）～13 日（火）には N J C からの生徒・教員 13 名を本学院に受け入れ、各種博物館におけるワークショップ、授業交流、実験教室、河川調査などの科学教育プログラムを行なうとともに、歓迎お茶会等の文化交流を行なった。世界の水問題をテーマとしたミニシンポジウムを行なった。本プログラムは JST のさくらサイエンス事業の補助を受けている。

f. 「これがサイエンスだ！」ゼミ合宿

今年度は夏合宿として 7 月 26 日（木）から 28 日（土）、冬合宿として 12 月 21 日（金）から 23 日（日）の 2 回本庄キャンパスでゼミ合宿が行われた。生徒たちは学年の枠を超え各教科ごとに活動を行なった。全体の特別講義や最終日には合同発表会も実施された。夏合宿では昼間は数学 AB・生物・情報パートに分かれそれぞれの課題に取り組み、夕方はコンピュータ将棋協会瀧澤武信会長（早稲田大学教授）による特別講義『コンピュータ将棋の歴史と展望』、2 日目の朝には 2 人の教員による物理学のジョイント講義が行われ、素粒子や重力に関する最新の研究が紹介された。冬合宿では数学・物理・情報・地学の 4 パートに分かれそれぞれの課題に取り組み、2 日目には本学院の OB であり、青山学院大学理工学部物理・数理学科助教の山本大輔先生による特別講義を行なった。

上記のような活動を宿泊しながらすべて学内で行なうことができるのは本学院ならではのあり、生徒もいつも過ごしている本庄キャンパスの研究活動の場としての側面に触れ、新鮮な気持ちで意欲的に取り組んでいた。

g. 国立天文台（三鷹キャンパス）の見学

8 月 1 日（水）に国立天文台三鷹キャンパスを訪問し、国立天文台の最先端研究テーマなどについて、JASMINE 検討室長郷田直輝教授をはじめ関係スタッフによる解説を聞いた。宇宙の研究でも活用しているプラネタリウム（4D2U ドームシアター）では現在観測可能な宇宙マップを地球から宇宙の果まで 3D による多様な視点で宇宙の仕組みについて学んだ。

大型低温重力波望遠鏡（KAGRA）のベースとなった TAMA300 の見学では、重力波を検知する原理について学んだ。

先端技術センターでは ALMA 望遠鏡等に使われている電波受信機の組み立て現場を見学した。赤外線位置天文観測衛星（JASMINE）、口径 30m 超大型望遠鏡 TMT 計画など宇宙のフロンティアに挑む日本の最先端研究についても体験した。

h. カミオカンデ見学

8 月 23 日（木）から 24 日（金）の 2 日間、スーパーカミオカンデ等日本が誇る最先端研究施設の見学および研究者等との交流を本学院生徒 22 名が体験した。23 日は神岡鉱山に設置されたスーパーカミオカンデ（Super-Kamiokande）、カムランド（KamLAND）、かぐら（KAGRA）、24 日は野辺山天文台を訪問した。

スーパーカミオカンデは世界最大の水チェレンコフ宇宙素粒子観測装置で、ニュートリノに関する様々な研究が行われている。東京大学宇宙線研究所のご協力により、今年は12年ぶりの大規模改修工事により50,000トンの超純水を蓄えたタンクや、重力波の検出装置などが見学できた。

i. 小笠原研修

この研修は06年に開始し、18年度で12回目を数える（途中1回台風のため中止）。今年は8月25日（土）～30日（水）の日程で実施した。当初は、オガサワラグワを中心とした母島の希少植物観察を中心とした研修であったが、お世話になっている母島へのお礼を考え、11年から母島子供科学教室を開催している。当初は参加人数も少なく3人の年もあったが、地域に認識されてきたのか、年々参加者が増えている。会を重ねるごとに、母島観光協会との連携が深まり、密度の高い研修活動に近づいていると言える。今年度は特に、母島に於いて観光協会並びに環境庁のご協力を得、小笠原の自然環境に関する2つの密度の高いワークショップを実施することが出来た。昨年は台風のため実施できなかった南島のワークショップも体験することができ、参加生徒にとっては収穫の多い研修となった。

j. Japan Super Science Fair (JSSF) 2018

11月14日（水）～11月18日（日）に立命館高等学校が主催した大規模な国際高校生科学フェアJSSFに生徒3名が参加し、研究発表・課題コンペ・講義・遠足・文化交流等を行なった。うち1名はNJCTとの共同研究発表を行なった。

k. 稲門 Jr. 参加

2018年11月18日（日）に早稲田大学高等学院で行なわれた「稲門 Jr.」に参加し、1件の研究発表「発電菌による水質浄化」を行なった。

l. Thailand International Science Fair 2019 (TISF) および Mahidol Wittayanusorn School (MWIT) との交流活動

2019年1月5日（土）～1月13日（日）に生徒9名がMWITを訪問し、科学交流・授業交流・文化交流を行なった。その間、7日～12日に開催された、世界最大規模の高校生国際科学フェアであるTISFに参加し研究発表・ポスター発表・文化交流・遠足等を行なった。研究発表ではコメンテーターから「理想的な、模範となる研究発表」という最高のお褒めの言葉をいただいた。

なお、これに先立つ2018年4月18日（水）～24日（水）の日程でMWITの生徒9名教員2名が本学院を訪問し、授業参加・企業研究室訪問・大学訪問等を行なった。教員1名は本校生徒に対して化学の授業を行なった。このような形で、他校にはない深い交流形態となりつつある。

m. 本庄市民シンポジウム「川のシンポジウム 2019」

3月16日（土）に早稲田リサーチパークにおいて、本学院と藤田小学校の主催で開催した。例年、本庄市民に向けて市内河川環境の啓蒙活動を目的として、この時期に実施している。「小山川における外来エビ・在来エビの性比と環境ホルモンの関係」「藤田小学校における本庄学院の出前授業の教育効果」というテーマで河川研究班が研究成果を発表した。

高校と小学校が市民に向け、河川環境について啓蒙するシンポジウムを開催するということは全国的にも極めて稀な例として注目を集めている。

⑥ SGH（スーパーグローバルハイスクール）

a. 研究開発の概要

「国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム」の開発研究を目標として2015年度に指定を受け、実施4年目にあたる2018年度は全学年がSGH指定期間の在校生となった。各研究課題における探究型プロジェクトは継続・向上しており、授業における教科間連携も活発化した。全校生徒対象に年1回しているSGH定点調査では、多様な人々が集うコミュニティーを肯定的にとらえ海外事情への関心が高まりつつある傾向が見えてきている。国際学習交流の振り返りでは「交流を経験した」だけでなく交流の内容を考察する傾向が高まっていることが観察された。

5年間の本学院SGH事業最大の里程である国際高校生学会(Waseda International Symposium on Education and Culture, 以下WaISEC)は全校で参加するグローバルな学びのプラットフォームとして企画し、11月15日～18日に海外校6校、国内校2校を迎えて実施した。高校生学会のメインである「研究発表」には2年生全員が参観したほか、3年生は学年集会での海外ゲスト歓迎行事、

1 年生はクラス単位での海外ゲスト授業体験企画など、全生徒と教職員が **WaISEC** に関わるプログラムとした。1 年生から 3 年生までの約 150 名の **WaISEC** 実行委員が精力的に活躍し、**SGH** 事業の研究仮説である「パートナーシップ構築力」を発揮しながら高校生国際学会を成功させた。

17 年度の導入開始から 2 年目となる第 3 学年の全員を対象にした卒業論文一斉指導および卒業論文評価基準の統一は、一斉指導の方法や評価基準の教員間の理解をさらに深める手立ての検討を進路指導委員会が中心となって進められている。国内外 8 ヶ所での夏季フィールドワークを核とした各研究課題では、年度当初から各研究課題の成果を **WaISEC** で発表することを義務付け、7 月と 9 月に中間報告会での報告、10 月の合同事前学習会、**WaISEC** での英語の口頭発表とポスター発表、2 月に英語と日本語でファイナルペーパーの執筆というシラバスを実施した。学校外の組織等との連携も進み、ソウル国際高校との通年オンライン授業、早稲田大学高等学院およびハナ高校との協力で開始した短期交換留学、稲稜祭と本庄市の「六高祭」でのネパール人権擁護活動支援、本庄市内の教育支援ボランティアなど活動が広がっている。**SGH** 事業開始時はなじみが薄かった研究発表形式「ポスターセッション」は生徒と教職員間に理解が定着し、授業内でも活用が進んだ。

b. **SGH** 研究課題の授業内での展開

1) 第 3 学年「総合的学習の時間」での卒業論文製作一斉指導

早稲田大学グローバルエデュケーションセンター内ライティング・センターと連携し、1 回の第 3 学年に対する講習会を実施した。

2) 第 1・2 学年英語授業内での **SGH** 課題の展開

第 1・2 学年の英語習熟度別授業では、「家庭基礎」の 2 学期の指導内容である「食と生活・社会」の内容を踏まえたプレゼンテーションの授業および教科横断型授業（第 1 学年）、およびグローバルな問題について発表と意見交換（第 2 学年）の授業を展開。前年度の授業案活用と生徒の成果物の教材化も進んだ。

3) 第 2 学年および第 3 学年選択科目授業内での **SGH** 課題の展開

研究課題の 1 つ『「世界文化遺産」紡績業を軸にした教科横断型授業の開発』の成果を踏まえ、第 2 学年世界史 B および第 3 学年古典 B で中国と日本の近現代の深いかかわりについて授業を展開した。第 3 学年選択科目では、「政治・経済(**SGH**)」でソウル国際高等と通年のオンライン学習交流を実施。受講生 26 名が成果を **WaISEC** で英語で発表した。また「**Academic English (Advanced Discussion)**」では **WaISEC** での研究発表分科会で司会者またはファシリテーターとして貢献するための学習も取り入れた。

c. 各研究課題における国内外生徒派遣と成果の普及

夏期の国内外フィールドワークを核とした課題探究活動を継続し、発展させた。**SGH** の夏季フィールドワーク(以下 **FW**)への参加は 1 人 1 か所という条件を提示した上で全校生徒を対象に公募し、コーディネーター教員が研究課題の趣旨に応じた選考方法で参加者を決定した。国内外 **FW**・シンポジウム参加は 67 名（うち海外派遣は 53 名）となった。

1) 沖縄 **FW**（研究課題 A-1「グローバル社会と人権」教材開発）

沖縄で基地と人権をテーマにした現地調査を実施(8 月 6 日～8 月 9 日、生徒 5 名、引率教員 1 名)。研究テーマを追求すべく生徒が行程を組み、県立那覇国際高校との意見交換会、沖縄国際大学訪問、米軍基地に関わる各地域施設の巡検や関係者取材などを実施した。3 年間の取り組みを卒論にまとめた生徒は優秀論文の事例として 2 年生に成果発表をした。

2) 上海・蘇州 **FW**（研究課題 A-3「世界文化遺産」紡績業を軸にした教科横断型授業の開発）

過去 2 か年の研究成果および事前学習会に基づき、上海でのフィールドワークに加えて蘇州中学で 2 校合同学習会実施（7 月 25 日～30 日、生徒 7 名、引率教員 1 名）。卒業論文のテーマとして研究をする生徒もいる。

3) シンガポール **FW** と来校交流（研究課題 B-1 インバウンド観光プランの考案・実行と相互評価）

シンガポール **National Junior College**（以下 **NJC**）と年度始めから企画を進め、「状況的学習」の考え方をベースに事前準備を経て **NJC** 訪問とシンガポールでの **FW** を実施（7 月 12 日～15 日、生徒 5 名、引率教員 1 名）。オンラインで協働学習を継続したのち、11 月 6 日・13 日に **NJC** チーム（生

徒 7 名、教員 1 名) が来日し学習交流を行なった、研究成果は筑波大学坂戸高校主催「全校 SGH 生徒成果発表会」(ポスターセッション)と早稲田大学情報教育研究所主催「教育の国際化研究会」(英語による口頭発表)で発表した。

4) ジョグジャカルタ FW と来校交流 (研究課題 B-3 相互訪問とオンライン交流で進める発信型プロジェクトの開発)

WaISEC での合同研究発表を先方に提案し、「防災対策のあり方」「伝統文化伝承のあり方」をテーマにした FW を実施 (8 月 20 日～8 月 25 日、生徒 8 名、引率教員 2 名)。ジョグジャカルタの交流校訪問時には研究の進め方の打ち合わせを行なった。オンラインで両国混成チーム 2 つによる協働研究を進め、WaISEC でそれぞれが共同で研究発表を行なった。「防災対策」研究チームは 12 月に文部科学省主催の全国フォーラムでも成果報告 (ポスター発表) を行なった。

5) 韓国 FW (研究課題 C-1 中国、韓国、台湾の高校とのテーマ学習型交流の開発)

日韓関係の歴史、および SDGs についての事前学習を踏まえて安養外国語高校への歩訪問交流を実施 (8 月 7 日～11 日、生徒 26 名、引率教員 2 名)。日韓総勢 78 名生徒が参加する「日韓高校生人文フォーラム」で「多様性」を大テーマに、「ジェンダー間の理解」「社会的少数者の理解」「日韓関係の理解」について英語と日本語での討論を 3 日間かけて行なった。成果は WaISC で報告した。

6) ネパール FW (研究課題 C-2 国際共生学を踏まえたボランティアの充実)

貧困と人身売買被害者救済に取り組む団体「ラリグラス・ジャパン」の指導と支援のもと、同団体によるネパールでのスタディーツアーに参加 (8 月 4 日～14 日、生徒 7 名、引率教員 1 名)。本庄市の「六高祭」で広報活動 (7 月) および稲稜祭での支援バザー (10 月) を実施し、売上の 229,678 円を同団体に寄付した。

また、スタディーツアーに参加した 5 名に加えてそれを支援する生徒 2 名とが関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで行われた「SGH 甲子園」に参加し、ポスター・プレゼンテーション英語部門で発表した。

7) 屋久島 FW (研究課題 C-2 国際共生学を踏まえたボランティアの充実)

自然環境に関する事前学習を踏まえて屋久島での清掃ボランティア活動を体験 (8 月 31 日～9 月 1 日、生徒 9 名、引率教員 1 名)。経済活動、環境保護と国際共生についての考察の成果発表を WaISEC で行なった。

8) 韓国ハナ高校主催の国際シンポジウム参加 (研究課題 C-3 WaISEC (Waseda International Symposium on Education and Culture) 実施)

7 月 23 日～27 日に生徒 10 名・教員 1 名が参加。国際協力の手法を題材とした英語での研究発表とディスカッションのスキル向上を体験。参加者は WaISEC 実行委員のリーダーとして、プログラム全般の企画と研究発表の質向上とのため、精力的に活動した。

d. 研究支援と成果の普及

<各研究課題ベースの学院生対象課外講義>

研究課題 A-3 特別講義 (6 月 9 日):

「昨年の蘇州調査について」原島野乃 (早稲田大学文学部 1 年生)、「昨年の上海調査について」中島安 (早稲田大学政治経済学部 1 年生)「江蘇省蘇州中学について」沈凌依陽 (早稲田大学社会科学部 1 年生)

研究課題 B-3 特別講義 (6 月 8 日):

「ヒンドゥー教とラーマーヤナ物語」坂井淳一教諭 (公民科、倫理)

WaISEC 事前学習特別講義 (10 月 13 日):

「多文化共生を学ぶ」平山雄大先生 (早稲田大学 WAVOC 助教)

WaISEC 事前学習特別講義 (9 月 25 日):

「研究発表ポスター制作の ABC」半田亨教諭 (情報科)

<WaISEC の基調講演、生徒研究発表、FW> (すべて英語で実施)

基調講演 (11 月 15 日):

「共生のために」長谷川まり子氏 (フリーライター、ラリグラス・ジャパン代表)

研究発表 (口頭):

在校生 7 本（うち 2 本はソウル国際高校生徒との協働研究成果発表）
ジョグジャカルタ第 2 高校生徒との共同発表 2 本、ゲスト校発表 7 本
研究発表（ポスター）：
在校生 18 本（うち 9 本はソウル国際高校との協働研究成果発表）
ジョグジャカルタ第 2 高校生徒との共同発表 2 本、ゲスト校発表 10 本

e. 英語授業について

<習熟度別グループ授業の継続>

第 1 学年「英語表現Ⅰ」と第 2 学年「コミュニケーション英語Ⅱ」で各 1 単位、および第 3 学年「英語表現Ⅱ」で **Standard** と **Advanced** のクラス 2 分割授業を通年で実施。授業中のパフォーマンス観察および第 3 学年全員を対象にしたアンケートの結果を受けて、評価法について学外の知見も得ながら研究を継続している。

<外部英語試験>

全校生を対象に、4 月は **GTEC Advanced**(3 技能版)、9 月に **TOEFL**（第 3 学年全員、第 1・2 学年の上級レベル生徒）または **TOEFL Jr**（第 1・2 学年の標準レベル生徒）の受験を義務付けた。

<課外授業>

①始業前に週 2 回各 30 分の自習サポート「英語朝練」を導入。基礎力補習の希望者を対象に計 10 回開き、登録者のうち 14 名が全出席。

②スタンフォード大学提供による遠隔授業”**Stanford e-Japan**”に継続して参加。同大学の応募エッセイ選考を経て、秋学期は第 2 年生 1 名が受講。参加推進のため、学習成果発表会を開いた。

<授業実践研究> 以下の実践研究を行い、①～③は学内公開授業とした。

①「コミュニケーション英語」で 1 年生と 2 年生の学年横断授業（ポスターセッション）を計 6 セッション実施した。

②通常は習熟度別グループで実施している「英語表現Ⅰ」を合同授業にし、ポスターセッションを計 8 セッション実施した。

③「コミュニケーション英語Ⅰ」と「家庭基礎」において、児童労働を題材にした教科横断型授業を実施した。

④公民科の 3 年選択科目「政経(SGH)」の英語発表準備に英語科メンバーがティームティーチングの形でサポートした。

⑦高大一貫教育

a. 学部説明会

第 2 学年を対象とする学部説明会は、6 月 2 日（土）と 10 月 19 日（金）の 2 度にわたって実施された。6 月の説明会は、例年と同様に午前の部と午後の部に分けて行なった。午前の部は、早稲田キャンパスにて午前 9 時より開始し、社会科学部、教育学部、国際教養学部、政治経済学部、法学部の順で、各学部の教員によって 30 分ずつの説明がなされた。午後は、文系選択者と理系選択者とに分かれ、文系選択者は戸山キャンパスに赴き、文学部と文化構想学部についての説明を受けた。理系選択者は西早稲田キャンパスに足を運び、基幹理工学部、先進理工学部、創造理工学部に在籍する本校卒業生から、それぞれの学部の概要や学生生活の様子などについて説明を受けた。10 月の説明会は、本学院の稲稜ホールにおいて実施された。午前 10 時 15 分より開始し、人間科学部、スポーツ科学部、商学部の順で、各学部の教員により 30 分ずつの説明が行なわれた。学部説明会は、それを通じて生徒がそれぞれの学部・学科への理解をより深いものにするだけでなく、付属校生としての自覚を新たにし、また自身の学びの幅を広げる機会にもなっている。

b. 理工学部説明会

6 月 9 日（土）の 13 時 30 分～16 時 50 分に西早稲田キャンパスにおいて理工 3 学部による「附属・系属校生徒のための進学説明会」説明会が行なわれたが、本学院としては第 2 学年理系進学希望者を対象とした。生徒は教室を移動しながら、自身の興味のある学部・学科の話聞いた。また、例年午前中には本学院独自の取り組みとして、希望者に対して、理工 3 学部および教育学部理学科のいくつかの研究室を訪問する、ということを行なっている。今年度は、電気・情報生命工学科、教育学部理学科（生物学専修）からの協力を得た。生徒たちは、研究の現場を垣間見ることができ、今後の

進路の参考とすることができた様子であった。

c. サマーセミナー

夏休み開始直後の7月13日(金)・14日(土)に開催した。18年度は初日10講義、2日目7講義を設定し、計17名の学部教員を招いて、専門分野に関する講義を行なった。学部進学を考える上でおおいに参考になるものであったが、クラブ活動の合宿や試合・コンクール等の日程が重なるため、参加者の総数が年々減少していることは深刻な問題である。生徒の参加率を上げるために、次年度以降は時期を改め、9月開催の行事としてリニューアルする予定である。

d. 学部開放科目

早稲田大学は多くのオープン授業を開講している。本学院は、大学キャンパスへの移動時間の関係で学部開放科目の生徒の受講は、水曜日と土曜日の午後が中心となる。18年度は春学期、秋学期ともに若干名の受講があった。

⑧生徒指導

本学院は、入学定員320名という比較的小規模な学校であることのメリットを生かし、各教員が生徒との関わりを密接にもち、個々の生徒に目が行き届くような指導を心がけている。18年度は、17年度に引き続き以下の3点を重点目標として指導を行なった。

第1は「本学院のよき伝統である『自由な校風の維持』である。

自由を享受するためには、それ相応の自覚・良識に裏打ちされた規律が必要である。校則の少ない自由な校風を維持していくためには、各自が本学院生としての自覚を持つことが求められている。生徒会を中心に「自治」を前面に出し実現することを今後も継続する。

第2は「一人の人間として、互いに切磋琢磨する」ことである。

目標を高く据え、学識や徳行を深めていく。学識や徳行が深まれば深まるほど、その人柄や態度が謙虚になる。「学部進学」を視野に入れ、1か月1講座の割合で「キャリアデザイン講座」を実施し、自らの進路についてさらに指導を行なった。

第3は「他者を思いやり、仲間・施設を大事にしよう」ということ。

いじめや中傷といった他者を傷つけることはあってはならない。他者に対して謙虚であれば、思いやりの気持ちも生じる。「うそをつかない」「言い訳をしない」「約束を守る」の3つの約束について、集会を通じて生徒に説き、他者へ自らの思いを遣わす「思いやり」の気持ちが、学院全体のマナー向上につながろうと指導した。校則が少ない本学院であっても、各人が思いやりをもって行動することが生徒指導をゼロにする根本であると教職員にも協力を呼びかけ、特に校内美化に取り組んだ。残念ながら教室残置物は減少せず、器物破損も複数発生した。次年度の課題としたい。

上記の方針を実現するための具体的方策として、年間を通じてLHRで生徒へ継続的な指導を行なった。また、課外講義として学外の有識者や専門家による様々な講演を行ない、生徒への啓発を促した。そして教員組織としては、特に組主任は学年集団としてのまとまりを一層強固なものにすべく、学年集会等を通じて学年ごとに必要な生徒への指導を行なった。

19年度は教職員が一体となって、学院生としての自覚を持つよう繰り返し指導を行なうとともに、生徒とコミュニケーションをとり、一人一人の生徒把握につとめる取り組みを強化することが課題である。

⑨キャリアデザイン講座

新学習指導要領で示された「キャリア教育の充実」を意識して、本年度より本学院の同窓生や本学校友などを招聘して「キャリアデザイン講座」を連続的行なった。4月、5月、6月、9月、10月、11月は各1名、12月のウインターセミナーは7名、2月は2名の講師を招聘した。同窓会と校友会の協力を得て実施できたことが新たな試みである。

Ⅲ. 生徒

①生徒受入

a. 入学試験全般

志願者総数は3,079名で、前年比196名増であった。東京都・埼玉県からの志願者が増加した。入学者数は344名で、内訳は男子191名(前年度比8名増)、女子153名(同2名増)である。出身地(最終在籍中学校の所在地)別の入学者数は次の通りである。

埼玉：139、東京：90、群馬：18、神奈川：24、千葉：18、他道府県：16、海外：39

入試広報として、本学院での説明会を3日6回（7月・9月・11月）実施したが、全ての回で全体会は予約満員となった。その他、早大附属・系属7校合同説明会（7月1日（日））、海外3コース（13都市）の学校説明会・相談会、出版社・学習塾等主催の説明会（24会場27日）に参加した。受験生・保護者等との個別相談数は1,321件で、前年度比で約50件の減少となった。

学院見学・案内は、海外在住者に限定して入試期間・土日祝日・学校行事日を除いて随時行なった。18年度の見学・案内は182件で、前年度から6件の減少となった。

b. 入学試験

全入試区分を通じて特段のトラブルや混乱もなく実施した。一般入試・帰国生入試の2次試験日が神奈川県立高校、東京都立高校の入学試験日と重複したが、日時振替で対応した。全ての入試区分で男女を合わせた志願者数が増加した。一般入試・帰国生入試の1次試験は、例年通り早稲田・本庄の2会場で実施した。入試区分別の入学者数は、次の表の通りである。

| 区分 | 男子 | 女子 | 合計 |
|-------|-----|-----|-----|
| 一般入試 | 94 | 69 | 163 |
| 帰国生入試 | 20 | 12 | 32 |
| α選抜 | 47 | 35 | 82 |
| I選抜 | 15 | 10 | 25 |
| 合計 | 176 | 126 | 302 |

c. 指定校推薦

指定校推薦による入学者数は次の表の通りである。一般指定校の被推薦率が上昇した。

| 区分 | 男子 | 女子 | 合計 |
|-------|----|----|----|
| 一般指定校 | 10 | 17 | 27 |
| 地元指定校 | 5 | 10 | 15 |
| 合計 | 15 | 27 | 42 |

d. 入学決定者の集い

例年、入試後の入学手続きの後の土曜日に、手続き者を集めて「入学決定者の集い」を行なっている。これは、「早稲田大学本庄高等学院に入学する」というモチベーションを高めるとともに、具体的に入学式までにやっておくべき課題等や入学後のプログラムを説明して不安を少しでも解消することを目的として例年実施している。

19年度入試後の入学決定者の集い参加者数は全体339名（男子：179名、女子：160名）だった。

②生徒への配慮

a. 奨学金

学内奨学金の募集は、春と秋の年2回行ない、学外奨学金の案内も含め、LHRや本学院のホームページを通じて生徒へ広く周知している。奨学金のうち学内奨学金を受給している生徒は、春季募集16名、秋季募集17名の合計33名であった。いわゆる「家計点」が高い、すなわち経済的に困窮度の高い家庭が多い傾向は変わっていない。

学外奨学金の状況は既掲の通りである。受給者の合計は35名であり、学内奨学金と同様、経済的に厳しい状況が反映されている。

また、埼玉県授業料等軽減補助金は94名、埼玉県在住者を対象にした奨学のための給付金等を受けている者は17名であった。さらに国の制度である就学支援金受給者は第1学年190名、第2学年196名、第3学年164名で、合計550名となっている。

| 奨学金名 | 奨学生数 |
|-------------------------|------|
| 日本学生支援機構奨学金（学部進学後の至急予約） | 12 |
| 地方公共団体奨学金（埼玉県） | 8 |
| （東京都） | 2 |
| （横浜市） | 1 |
| （福島県） | 1 |

| | |
|---------|----|
| (深谷市) | 1 |
| 民間団体奨学金 | 10 |
| 合計 | 35 |

b. 保健室

保健室は学校保健計画に基づいて運営された。

1) 保健教育

各学年に健康教育講演を実施した（「課外講義」参照）。

2018 年度も競技スポーツガイダンスと連携し、運動部員へ学院の救急体制について、また熱中症予防、インフルエンザ予防について周知することができた。その他運動部員対象の救急法講習会を実施し、100 名を超える生徒が救命入門コースを受講することができた。例年、教職員対象の救急法講習会も実施しているが、より多くの参加が見込めるよう、実施時期を検討したい。

2) 保健管理

4 月 19 日（木）に生徒定期健康診断を実施し、全生徒（留学中の者を除く）が受診した。要受診となった者には、精密検査、治療を促し、学業や部活等に集中できる環境づくりを支援している。また、医師による健康相談（眼科・耳鼻咽喉科・歯科・整形外科）を実施し、生徒、教職員の健康問題をサポートした。

18 年度は 17 年度と同様に、インフルエンザが大きく流行し、124 名の生徒（概ね第 1・2 学年）が罹患した。今年度は流行期前に、クラスの世論広報委員、部活動代表者にインフルエンザ予防について周知した。また、早苗寮、梓寮にても同様の講義を行なった。今後も、適切な時期に適切な方法で正しい情報提供に努め、感染拡大を防止したい。

c. カウンセリング

授業期間は毎週水曜日と土曜日の午後に、大学学生相談室のカウンセラー（臨床心理士）による相談を実施した。発達障害が疑われる生徒の相談は近年増加傾向で、大学の障がい学生支援室と連携して生徒の支援にあたり、学部へと引き継いでいく 必要性がある。

d. 交通安全

4 月 11 日（水）に、第 1 学年オリエンテーションの一環として、「交通安全講話」を実施した。

本庄警察署員による講話で、主に自転車の安全走行と登下校中の防犯に関する内容であった。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなりうることを具体例で示す内容で、生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。尚、2014 年度より講話の中で防犯に関する内容を扱いはじめ、18 年度が 5 度目となる。

2017 年度より、推奨通学経路を指定し、多くの生徒がその推奨経路を安全走行して投稿した。安全に関する意識が高揚し、イヤホン走行をする生徒はいなくなった。成果として 2018 年度は自転車事故ゼロを達成することができた。

e. 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額 5,000 円を徴収している。15 年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。過去 4 年度分の支給実績は次頁の通りである。

| 年度 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 |
|------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 支給人数（延べ） | 608 | 770 | 791 | 916 |
| 支給人数（実数） | 230 | 270 | 254 | 294 |
| 支給上限額（10 万円）到達者数 | 8 | 11 | 6 | 11 |
| 支給金額（円） | 3,102,798 | 4,350,717 | 4,146,464 | 5,092,429 |

f. 学校安全管理

キャンパスが本庄市と児玉町にまたがる浅見丘陵に位置し、その全域が大久保山遺跡であること、さらに自然保護問題の事情もあり、校門や塀がない。そうした都市部の学園とは大きく異なる環境の中で生徒の安全確保に取り組むため、教員日直制を設けている。日直教員は、下校時刻の遵守のために生徒に帰宅指導をするだけでなく、校地巡回により不審者進入の未然防止に努めている。

現実的で科学的な安全管理推進に向け、キャンパス管理室（運営は外部委託）を設置し、キャンパス内のセキュリティを強化している。警備員日中 6 名、夜間は 4 名による巡回・点検などマンパワー主体の業務に加え、最新テクノロジーを活用した防災・防犯・監視・入退出機器の設置により、24 時間監視体制と緊急時の出動体制を維持している。校舎内のセキュリティ機能は高いが、広大なキャンパスに点在する諸施設のセキュリティレベルをさらに向上させることが今後の課題である。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第 19 条第 1 項に規定される安全衛生委員会が設置され、本庄プロジェクト推進室長を委員長に、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

14 年 2 月に埼玉県本庄警察署との相互連携に関する協定書を締結した。公立校と比較し地元の情報が入りにくい私立学校の特質上、警察と連携を図ることは、生徒の健全育成に資するだけでなく、地域との情報ネットワークを構築し、安全体制を強化するうえでも大きな意義があると考えている。

東日本大震災の教訓を踏まえ、地元消防署と協力し、大地震発生を想定した防災訓練を 11 月 17 日に実施し、生徒の防災意識の高揚を図った。また生活の様々な場面で生徒が携帯電話等の情報機器を利用する機会が増加する中、違法・有害サイトへのアクセスによる犯罪に巻き込まれないよう、外部から講師を招いて情報教育セミナーを行なった。

③生徒進路

| 学部 | 学科 | 進学者数（計／男／女） |
|-----------------|------|---------------|
| 政治経済 | 政治 | 30／ 10／ 20 |
| | 経済 | 35／ 21／ 14 |
| | 国際政経 | 12／ 6／ 6 |
| 法 | | 47／ 31／ 16 |
| 文化構想 文 教育 | 文化構想 | 16／ 10／ 6 |
| | 文 | 20／ 7／ 13 |
| | 教育 | 6／ 2／ 4 |
| | 国語国文 | 3／ 1／ 2 |
| | 英語英文 | 1／ 1／ 0 |
| | 社会科 | 2／ 2／ 0 |
| | 理 | 1／ 0／ 1 |
| | 数 | 3／ 3／ 0 |
| | 複合文化 | 4／ 4／ 0 |
| 商 | | 34／ 27／ 7 |
| 基幹理工 | | 37／ 32／ 5 |
| 創造理工 | | 27／ 20／ 7 |
| 先進理工 | | 23／ 14／ 9 |
| 社会科学 | 社会科 | 20／ 14／ 6 |
| 人間科学 | | 2／ 2／ 0 |
| スポーツ科学 | | 6／ 6／ 0 |
| 国際教養 | | 10／ 7／ 3 |
| 合計 | | 339／ 220／ 119 |

a. 進学学部

18 年度は 339 名が早稲田大学各学部へ進学した。各学部・学科・専攻・専修（基幹理工学部は学系）ごとの男女別の進学者数は前掲の表の通りである。

b. 他大学進学

18 年度卒業決定者のうち、早稲田大学推薦辞退者は 4 名だった。

IV. 研究活動

①教員の研究成果

早稲田大学本庄高等学院専任教諭は、個人研究費を支給されるほか、本年度は科学研究費（奨励研究）1件、早稲田大学特定課題研究費（新任の教員）2件、同（基礎助成）6件、同（特定課題B）5件を受給している。これを受けて、活発な研究活動が展開されている。本学専任教員の研究成果は多岐に及ぶが、以下、申告のあったものについて、列記し、紹介する。

a. 著書

- ☑ 齋藤正憲『ロクロを挽く女：アジアの片隅でジェンダーを想う』、雄山閣。
- ☑ 佐々木幹雄・齋藤正憲（編）『やきもの：つくる・うごく・つかう』、近代文藝社。
- ☑ 細喜朗『グローバル人材育成教育の挑戦 大学・高校での実践ハンドブック』グローバル人材育成教育学会（共著）
- ☑ 赤塚祐哉『世界標準の英語授業－国際バカロレアの英語教育とその実践－』（単著）松柏社 2018年 10月

b. 論文・研究ノート

- ☑ 上野幸彦「大久保山学とサイエンスティフィックリテラシー：韓国梨花女子大学開発 GSLQ による評価」『教育と研究』37（早稲田大学本庄高等学院紀要）。
- ☑ 上牧瀬香「有島武郎『星座』の受容：〈文豪ブーム〉と文学館、他メディア化」『有島武郎研究』22。
- ☑ 齋藤正憲「呪術師の誕生」『埼玉学園大学紀要』18。
- ☑ TAKAYAMA, Masahiro, Will the ELP Be an Effective Tool to Enhance Learner Autonomy in the Teaching and Learning of English at the Secondary School Level in Japan?, 『教育と研究』37。
- ☑ 羽田真「高等学校自転車競技部の指導における安全配慮義務：公道上での練習中に発生した事故事例に注目して」『教育と研究』37。
- ☑ 羽田真「公民科新必修科目「公共」についての考察（ハングル）」『教育と研究』37。
- ☑ 吉田茂「国語科の評価」町田守弘（編）『実践国語科教育法：「楽しく、力のつく」授業の創造』、学文社。
- ☑ 吉田茂ほか「源頼実集注釈稿下」『教育と研究』37。
- ☑ 細喜朗「高校生が考えるユニバーサルデザインプロジェクト」『英語教育 10月号第67巻(7号)p.24 - 25 2018年 10月 -

c. 口頭発表

- ☑ 太田洋平「非デザルグ射影平面の具体例について」、組合せ論サマースクール 2018（伊豆長岡）。
- ☑ 上牧瀬香「平成の「白樺」派受容：有島武郎『星座』を中心に」、有島武郎研究会第63回全国大会（2018.6）。
- ☑ 齋藤正憲「呪術師4人：バングラデシュのパゴールとコビラージ」、早稲田文化人類学会第19回総会・シンポジウム（2018.7）。
- ☑ 齋藤正憲「湿った風土の陶工たち」、『土の風土記：やきものが語るアジアの歴史と風土』（『やきもの：つくる・うごく・つかう』出版記念シンポジウム（2018.9）。
- ☑ 齋藤正憲「バングラデシュの呪術師：成巫過程における夢の役割」、日本オリエント学会第60回大会（2018.10）。
- ☑ 成瀬政光「問題作成活動を通じた意味づけの更新：内化と外化を意識した ECJ 法の利用」、全国数学教育学会第48回研究発表会（2018.6）。
- ☑ 成瀬政光「附属高校での文系学部志向の生徒に対する数学授業の実践：深い学びを促す ECJ 法の利用」、数学教育学会 2018 年度秋季例会（2018.9）。
- ☑ 成瀬政光「ECJ 法を用いた帰納的推論を促す試み：高校数学にて深い学びを促す指導モデルの一考察」日本数学教育学会第51回秋期研究大会（2018.11）
- ☑ 成瀬政光「高等学校数学科にて深い学びを促すためのアクティブラーニング教材に関する研究・実践」一般財団法人日本私学教育研究所平成30年度委託研究員研究成果報告会（2019.3）。
- ☑ 細喜朗「思考力を育成する英語授業 言語統合型授業の実践と課題」教育の国際化研究会、2018年 05月 15日
- ☑ 細喜朗「高校における CLIL に基いた思考力向上を目指す英語授業実践とポートフォリオの開発」日本 CLIL 教育学会 2018 年 07 月 14 日
- ☑ 細喜朗「批判的思考力を高めるための授業実践方法」関東甲信越英語教育学会 2018 年 08 月 19 日
- ☑ 細喜朗「高校における論証モデルを利用した思考力向上を目指すライティング指導の提案」言語教育エキスポ、2019 年 03 月 10 日

☑赤塚祐哉”Fostering Creative and Critical Thinking Skills - Analysis of the International Baccalaureate’s EFL Approaches -” The 23rd Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (国際会議) 2018 年 8 月

☑根本 裕介「3 次の Fermat 曲線に対する p 進レギュレーターについて」早稲田大学整数論セミナー、2018 年 7 月 13 日

③特別研究期間

2 名が特別研究期間の制度を活用し、研究に従事した。

④研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年 1 回刊行している。18 年度は第 37 号を刊行し、論文 6 本を収録した。うち、1 本が英文、1 本がハングルによるものであった。

V. 教育研究施設

①校舎整備計画

新体育館の工事は 18 年 7 月から本格的に着工され、20 年春の竣工を目指して急ピッチで進んでいる。これは敷地面積 63,077.60 m²、延床面積 4,326.87 m²、地上 3 階の建物である。この新体育館が完成すれば、東の稲稜ホールから新体育館までと東西に長い施設配置ではあるが、本学院の教育施設は一応の完成を見ることとなる。

②学内施設

a. 教室

教室は普通教室 23、ゼミ室 4、理科実験・講義室 5、情報処理室 2、美術室 1、体育講義室 2、地理演習室 1、音楽教室 1、家庭科調理室 1、メディアルーム 1、CALL 教室 1、大教室 1 で構成され、各教室には IT 機器とスクリーンが設置されている。

b. 稲稜ホール

稲稜ホールは学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会、その他各種様々なイベント、音楽の授業やブラスバンド部・グリー部の活動、演劇部・軽音楽部等のミニコンサート等に常時利用されるほか、学外の機関の利用にも供している。それらを含め年間の施設利用回数は 100 回を超える。本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしている。

c. CALL 教室

PC 教室に隣接した 46 名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2 名 1 組の机には PC、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会やワークショップにも活用されている。2018 年度活用事例としては、始業前 30 分間の「英語朝練」や英語の学内公開授業（ポスターセッション）会場としての使用例があった。

d. コンピュータ・インターネット環境

95 号館を使用するようになってから、PC 室 2 室（46 名対応）を中心に授業や課外活動を展開している。PC 室は教科「情報」・選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、生徒の創作活動・検索活動に役立っている。また全ての教室に LAN の情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内 3 カ所に無線 LAN のポイントがあり、情報コンセントのない場所でも WiFi でノート PC やモバイル等のインターネットへの接続が可能である。このような環境のため、ノート PC や iPad を持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立っているようである。ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

e. 体育施設

1) 学院体育館

95 号館からの距離が遠く、体育の授業をはじめ学期集会等、移動の際にやや時間がかかる。バス

ケットボールコート 2 面分（公式の大会よりも狭い規模）の広さがあり、授業での使用頻度は非常に高い。また放課後クラブ活動でもバスケットボール部、バレーボール部が交替制で使用している。

2) 共通教室棟体育館

バスケットボールコート 1 面の広さがあり、授業では主にバドミントン、卓球、ダンスを行っており、学院体育館と同様に、使用頻度は非常に高い。放課後のクラブ活動では、卓球部、バドミントン部、剣道部が使用している。

3) サッカー場

サッカーコート 1 面を十分に確保できる広さであり、それを活かしたサッカーやハンドボール、ラグビーの授業展開ができています。授業や球技大会等行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは非常に良好である。

4) ラグビー場・陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稜祭、球技大会、マラソン大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビー部が使用している。

5) 野球場

主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。各種目授業を十分に展開できる広さである。マラソン大会ではスタート地点とし、クラブ活動では、硬式野球部が使用している。

6) テニスコート

テニスコート 6 面（クレー 4 面・オムニ 2 面）は、テニスの授業と、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

7) 部室棟

部室とトレーニングルーム、ミーティングルームがあり、多くの運動部が共用している。

8) 屋外施設全般

施設の整備、維持管理体制を体育科と各運動部で模索しながら、あくまで活動する生徒自身が主体的にその管理を進め始めている。

f. 図書室

16 年度より運営に業務委託を導入したが、利用者へのサービスはほぼ今まで通り行っており、委託に伴う大きな混乱等はなかった。15 年度に 90-7 号館へ移転したことに加え、16 年度から開室時間を 18 時まで 1 時間延長したことにより、入室者数は着実に増加している（一昨年度比約 50% 増）。但し、図書室を頻繁に利用する生徒はまだ一部に限られていると思われるため、より多くの生徒に図書室を有効活用して貰えるよう、学内関係個所と協力しつつ所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

g. 保健室

敷地が広大であるため、保健室から学院体育館、共通教室棟、稲稜ホールまで距離があり、そこでの急な傷病への対応が遅れがちである。移動方法、搬送手段については課題が残る。女子がベッドで休養するケースが多く、4 床あるベッドが埋まるが多かった。また、定期テストを保健室で受験する生徒が増加傾向にある。

h. 食堂

食堂はホールとパンショップから構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。生徒の食堂利用時間は、主に 11 時 00 分から 11 時 20 分までのコーヒブレイクと 13 時 10 分から 13 時 50 分までの昼休みである。食堂の座席数は 442 であり、ピーク時間帯に一時的な混雑は見られるものの、概ね問題はないと考えられる。そのほかの付帯設備として、自動販売機 4 台、給茶機 3 台、食券販売機 4 台が設置されている。食事時間帯以外は生徒の自習スペースやコミュニケーションの場として有効に活用され、また学校説明会（個別相談）や学年集会などさまざまな学校行事にも利用されて

いる。

③スクールバス

朝日自動車株式会社に業務委託して、本庄駅・寄居駅と本学院を結ぶスクールバスを運行している。今年度もバスに詰めて乗車することの徹底を行ない、バスの増便の数をおさえることができた。稲稜祭一週間前は準備のために始発バスに乗る生徒が増えるため増便を実施した。

④早苗寮

男子専用となった早苗寮の入居状況は、**104**名であった。入寮者のうちの多くは国内に実家がある生徒であり、**2**割ほどが家族が海外在住であった。

自治会行事は、春の新入生歓迎会、ビンゴ大会を行なった。

食事面では、早稲田大学プロパティーマネジメントとものに検討・改善し、ボリュームアップデーなどが功を奏し夕食の喫食率は高くなっている。しかし、朝食の喫食率は依然 **50%** 程度にとどまり、継続的な課題となっている。

今後は、男女**2**つの寮の生徒が切磋琢磨する仕組みを作り、これまで以上に寮の魅力を高める方策を考えている必要があると思われる。

VI. 社会・大学との連携

①保護者との連携：保護者の会

例年、年**2**回実施している。春の会は、クラス幹事決定と**1**年間の学習や行事に対する諸注意が内容の基本である。冬の会は、クラスや行事の状況報告、進級進学に向けた指導が内容の中心となる。

18年度は**6**月**16**日(土)と**12**月**16**日(日)に保護者の会を実施した。全体会・クラス別懇談会・個人面談という構成で行なわれ、**2**回とも全体会の後、生徒寮保護者会が実施された。**12**月の保護者会では初めての試みとして大学国際部国際課の協力で留学の勧めのプレゼンテーションをしてもらった。

②卒業生との連携

a. 同窓会

同窓会の運営体制が整い、活動内容がさらに充実してきた。**17**年度の学院教育への連携・協力体制も、例年通りに、学院からの依頼に対し、誠心誠意対応していただいた。学院からの依頼は、キャリア教育の一環としてのウィンターセミナーやキャリアデザイン講座への講師派遣、稲稜祭での出店の協力などであった。特に、稲稜祭では学院生への同窓会グッズのプレゼントもあり、大変好評であった。

同窓会の活動としては、就職活動支援セミナーを年**3**回開催し、卒業生から好評を得た。さらに、同好会活動では、ビジネス交流同好会、ゴルフ同好会、地域別OB会など年々盛んになってきた。

ホームページには、クラス会の開催案内等が載り、その情報は随時更新されている。役員会も定期的に開催され、次年度に向けての活動に備えている。また久しぶりにホームカミングデイを開催するという案が提案されている。

b. ウィンターセミナー

12月**8**日(土)に本学院卒業生と、早稲田大学キャリアセンターより講師を招いて、**7**件の講義を行なった。本セミナーは、生徒が先輩の経験談を聞いて、自分の将来を考え適切な進路選択をし、自己の将来の具体的なイメージを確立することを趣旨として行なわれている。参加した生徒は熱心に聴講し、多くの質疑応答が行なわれていたが、例年同様、第**3**学年の生徒の参加が少なかった。サマーセミナー(前掲)同様、生徒の参加率を上げるため、次年度は**9**月開催行事としてリニューアルする予定である。

③地域との連携

a. どんぐりプロジェクト

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が取り組んでいる「どんぐりプロジェクト」に参加した。これは「海の針葉樹林コミュニティ支援プログラム」の一環で、東日本大震災の復興支援が目的である。宮城県気仙沼市で採取したどんぐりの種を育て、成長した苗木を現地に植樹して防潮林を形成し、防災に役立てようとするものである。学部学生やWAVOCのスタッフとの月**1**回程度のミーティングでプロジェクト参加者同士の親睦を図り、活動を確認している。8月**31**

日（金）～9月2日（日）には生徒35名と教員2名およびWAVOCのスタッフとともに気仙沼市の東日本大震災復興記念前浜マリンセンターで植樹ツアーを行い、現地の方々の話を聞いたり、今後の防災の在り方を考えるフィールドワークに参加したりした。また、稲稜祭では気仙沼産海産物の乾物や銘菓を販売し、その売上金の一部を気仙沼市に寄附した。

b. 六高祭

7月29日（日）に、本庄市内の6つの高校が合同で文化祭を行なう「六高祭」が開催された。この六高祭は、16年度に本庄市合併10周年・はにぼんプラザオープンを記念してスタートしたものである。今年度は前日に台風が来た影響で参加できなかった団体もあった。本学院からは書道部、演劇部、ピアノ部、SGHネパール班が参加し、日頃の成果を披露した。また、生徒会執行部のメンバーも、この「六高祭」の実行委員として活躍した。

c. ボランティア活動

18年度は以下のようなボランティア活動を行なった。

- ・第3学年による全市一斉清掃
- ・硬式野球部による野球場外側道路清掃
- ・市役所主催の花の植え付けに生徒会が参加
- ・スーパーサイエンスクラブ河川研究班による以下のプログラム
- ・本庄市立藤田小学校での出張授業
- ・藤田小との連携で行なっている河川環境調査活動（年2回、小山川・元小山川）
- ・市立北泉小学校における「Basic Study」への協力（授業支援、7月の3日間）

d. 施設の開放

キャンパス内への入退出管理などセキュリティの確保が難しいため、校舎・体育館などの学外への貸与は行っていない。しかし、本庄市との友好的な協力関係を維持・発展させるため、本庄市民や中学校の陸上競技大会や、公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパークと本庄市との連携事業である「こども大学ほんじょう」の修了式に会場を例外的に貸与している。また市民のウォーキングコースやクロスカントリー大会開催にも協力している。

④教員の社会活動

a. 学会役員

魏晉南北朝史研究会監事

b. 学外委員

神奈川県立総合教育センター平成29年度国際バカロレアの理念に基づく教育に関する研究助言
本庄市行政不服審査会委員

c. 学外講師・出張授業等

上里町賀美公民館文学講座『恋歌の系譜』
本庄市民総合大学講師

d. その他

おおくぼ山スポーツクラブ代表日本英語検定協会英検面接委員
日本英語検定協会TEAP面接委員
埼玉県高等学校体育連盟サッカー専門部常任委員（北部広報部長）
埼玉県サッカー協会北部地区トレーニングセンタースタッフ
神奈川県立総合教育センター 平成30年度国際バカロレアの理念に基づく教育に関する研究助言者
NHK ラジオ高校講座「コミュニケーション英語II」講師

⑤教科書等の執筆

『国語総合』東京書籍
『精選国語総合』東京書籍
『新編国語総合』東京書籍
『古典B』東京書籍
『精選古典B』東京書籍
『新編古典B』東京書籍

『古典A』東京書籍
『情報の科学』日本文教出版

⑥外部資金の導入

- a. S G H (スーパーグローバルハイスクール) 7,400 千円
- b. さくらサイエンスプラン (科学技術振興機構)
アジアの学生を日本に招聘し、日本の科学技術体験と国際交流を目的とする事業 Singapore National Junior College 受け入れ資金 3,000 千円
Mahidol Wittayanusorn School (Thailand) 受け入れ資金 3,000 千円
- c. 一般財団法人日本私学教育研究所平成 30 年度委託研究費「高等学校数学科にて深い学びを促すためのアクティブラーニング教材に関する研究・実践」200 千円
- d. 平成 30 年度科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) (奨励研究) 課題番号 18H00240 「三波川変成岩のユニット境界における変形構造解析とその教材化」450 千円
- e. 公益財団法人 日本英語検定協会制度名:第 31 回「英検」研究助成実施形態:研究助成金「高校における三角ロジックを利用した思考力向上を目指す指導の提案～新学習指導要領に基づいて～」
2018 年 07 月-

⑦募金

18 年度の教育振興資金寄付件数は 100 件、寄付金額は 20,750,000 円であり、その他にも本庄高等学院指定寄付や部活動指定寄付を 13 件、3,791,325 円を受け入れた。今後も引き続き、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

⑧大学教育との連携

- a. 教育実習
例年と同様に教育実習生を受け入れた。
- b. 競技スポーツガイダンス
2015 年 2 月に実施された「コーチサミット (競技スポーツセンター主催)」に参加の際「高大一環」を村岡担当理事がコメントしたことをきっかけに「高大連携」「競技力向上・育成」を目的に、各運動部共通のテーマによる講演を実施した。
2018 年度は 4 回実施した。各回のテーマはつぎの通りである
第 11 回 「運動部員のための基礎栄養学」
第 12 回 「AED 講習」
第 13 回 「熱中症対策講座」
第 14 回 「各運動部諸問題の解決」
- c. 学部・大学院の授業担当
学部・大学院等における授業担当状況は次の通りである。
 - ・文学学術院 1 名
 - ・教育・総合科学学術院 1 名
 - ・教職大学院 1 名
 - ・人間科学学術院 1 名
 - ・スポーツ科学学術院 1 名なお、早稲田大学以外でも教育活動に参加している者が 1 名いる (埼玉学園大学人間学部非常勤講師)。

VII. 管理運営

①教員組織

- a. 教諭会
18 年度は定例教諭会が 11 回 (入試判定会、卒業・進級判定会は除く)、臨時教諭会が 11 回開催された。17 年度に比して回数は減ったが、臨時教諭会の中には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれる。特にスマートフォンや SNS 上での生徒同士のトラブルもあった。月 1 回の会議のため、時間が長くなってしまっているのが課題である。

b. 委員会

18年度はそれ以前の委員会活動の反省を含め、大幅な改編・統廃合を行なった。校務分掌のスリム化、教員の業務量の軽減化を目指した。統合の他、施設検討委員会、情報管理運営委員会、募金委員会は廃止した。以下に、各委員会の検討事項及び取り組みを紹介する。

- *教科主任会： 予算関係、カリキュラム・成績・進級・進学関連、および教科・学校の教務関連の内容を主として扱う。図書委員会を包含している。
- *学年主任会： 奨学生の選考、生徒表彰の選考。
- *生徒活動支援委員会・人権教育委員会（生徒会・稲稜祭・生徒指導、いじめ防止委員会（いじめ事案が発生した場合））： 日常の生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、稲稜祭（文化祭）開催、問題行動が発生した際の事実確認と生活指導計画の立案と実施、及び外部有識者による教員研修実施。
- *生徒指導委員会、人権教育委員会の旧来の生徒活動に関わる委員会を統合し、そこにそれまで生徒担当教務の職務だった生徒会・稲稜祭に関わる業務を含めた。人数を拡大しながら、生徒指導業務を半期交代にし、業務軽減を狙った。
- *寮委員会： 生徒寮の生活指導、寮規則の検討。
- *安全委員会： 旧来の学校行事運営委員会を母体として、加えて保健、その他安全配慮を目的として新しく作った。
- *広報・出版委員会：『杜』・『研究紀要』の編集刊行。
- *入試検討委員会：『学院案内』の入試部分の作成、指定校の決定、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加、入学試験要項の作成等。
- *施設検討委員会： 新体育館フロアの具体的計画の検討。
- *進路指導委員会： 各種セミナー（サマーセミナー、ウインターセミナー）、進学準備ウィークの立案及び実施、卒業論文報告会の準備及び実施、学部説明会の検討、卒業論文の評価や手引書の改訂、提出時期等の検討。
- *SSH検討委員会： SSH事業の立案及び実施、課外講義の実施、各種コンテスト・調査旅行への生徒引率、SSH成果報告会の立案及び実施、文部科学省へのSSH再申請。
- *SGH委員会： SGH事業の立案及び実施、生徒SGH委員会の組織運営、各種交流事業や調査旅行への生徒引率、SGH成果報告会の立案及び実施、文部科学省への年度末報告、SGH成果報告書作成。
- *留学・海外交流委員会： 今までの国内外交流委員会を改組し、留学の要素を加える。
- *学校評価運営委員会： 学校評価の立案、実施依頼、報告書の作成。

c. 教科別構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。前年度から専任教諭は1名増となった。

教科別構成

| 教科 | 専任教諭 | 非常勤講師 | 合計 |
|-------|------|-------|----|
| 国語科 | 6 | 6 | 12 |
| 地歴公民 | 7 | 12 | 19 |
| 理科 | 6 | 5 | 11 |
| 数学科 | 7 | 5 | 12 |
| 保健体育 | 5 | 4 | 9 |
| 芸術 | 1 | 2 | 3 |
| 英語 | 9 | 10 | 19 |
| 情報 | 1 | 4 | 5 |
| 家庭科 | 1 | 1 | 2 |
| 第二外国語 | 0 | 4 | 4 |
| 養護 | 1 | 0 | 1 |
| 合計 | 44 | 53 | 97 |

年齢別構成

| 資格 | 人数 | 21～30歳 | 31～40歳 | 41～50歳 | 51～60歳 | 61～70歳 |
|------|-----|--------|----------|----------|---------|---------|
| 専任教諭 | 44人 | 3人（7%） | 12人（27%） | 14人（32%） | 7人（16%） | 8人（18%） |

| | | | | | | |
|-------|------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 非常勤講師 | 53 人 | 20 人 (38%) | 9 人 (17%) | 8 人 (15%) | 7 人 (13%) | 9 人 (17%) |
| 全体 | 97 人 | 23 人 (24%) | 21 人 (22%) | 22 人 (23%) | 14 人 (14%) | 17 人 (18%) |

男女別構成

| 資格 | 合計 | 男 | 女 |
|-------|----|----------|----------|
| 専任教諭 | 44 | 36 (82%) | 8 (18%) |
| 非常勤講師 | 53 | 38 (72%) | 15 (28%) |
| 合計 | 97 | 74 (76%) | 23 (24%) |

d. 教員の授業担当時間

18 年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。17 年度から大きな変動はない。

| | |
|---------|----------------------------------|
| 専任教員 | 14.1 時間 (除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭) |
| 役職者以外 | 15.0 時間 |
| 役職者(教務) | 7.8 時間 |
| 非常勤講師 | 6.7 時間 |

②事務組織

事務職員の担当別人数は次の表の通りである。専任職員および嘱託の嘱任・解任および配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては、大学が契約窓口となり人材サービス会社から派遣されている。なお図書室は、16 年度より業務委託となっている。

③生徒の出欠席・成績処理

早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「**School N@vigator**」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。具体的な運用は以下の通りである。

出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。

成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

④広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。『緑風』は 6 月と 12 月に発行し、教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されている。『杜』は保護者の会「杜」編集委員会により、年 1 回、3 月に発行される「保護者の会だより」で、同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

ホームページ (<https://www.waseda.jp/school/honjo/>) ではタイムリーなニュースやできごとを継続的に発信

しており、トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行なっている。ホームページにおける課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自の H P がある公認団体（クラブ）は、URL も掲載し、クラブ独自の情報発信も行なっている。

また、本学院保護者へ迅速かつ確実に情報を伝達するため、**FairCast**（N T T データ(株)提供）システムを導入している。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、保護者への迅速な情報発信を行なっている。

VIII. 関係者評価

2019 年 4 月 20 日、早稲田大学本庄高等学院（埼玉県本庄市）にて、関係者評価を実施した。会

部関係者として、以下の3名の参加を賜った（敬称略）。

長崎潤一 早稲田大学・教授

中山義治 熊谷工業高校・教頭

氏家 勉 本庄東中学校・校長

本庄高等学院からは、影森徹・教務担当教務主任、太田洋平・生徒担当教務副主任、齋藤正憲・大学点検・評価委員会委員（早稲田大学）が参加した。

長崎潤一氏からは、大学教員の視点から、授業評価の運用について、助言を頂戴したほか、中山義治氏とは、英語教育の拡充に向けて、意見交換を行なうことができた。また、氏家勉氏は地域を同じくする学校の立場から、地域との連携について、貴重なご意見を頂戴した。地域との連携をより一層拡充していく必要性を確認することができた。

なお、ご参加いただいた方々からは、本稿の卒業論文への取り組みが探究的であると高い評価をいただいた。